

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 大江健三郎『個人的な体験』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



火見子のMG



包帯を巻いたアポリネール

第 35 回のツイキャス読書会の課題図書は、大江健三郎さんの『個人的な体験』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『個人的な体験』 感想文

私は、最初からバードがそんなに悪い人のように思えませんでした。

私は子供がいないので想像なんですけど、男の人は女の人と違って子供ができて自分の体には何の変化もないし、妻のお腹が大きくなっていくのは日々感じられるけど、お腹は透明でもないから中が見えないし、ある日突然、あなたが父親です！って言われてすぐにそうか！と喜んで納得できる人ばかりなのかな？と思いました。初めから子供が欲しいと思っている人はいいいけど、何か実感がないまま、お父さんになる準備のできていないままの人の場合は葛藤があるのかもしれないと思いました。

バードの赤ちゃんは障害をもっていて、死んでしまえばいいと思っていたのはすごく酷いけれど、そう言いながらもこれから死んでいく赤ちゃんが雨に濡れないように車に幌を付けたり、その前からも赤ちゃんの事をずっと考えてる様子が分かったので、バードの気持ちが良い方になって欲しいなと、バードが赤ちゃんの大切さを早く気付いて欲しいなと応援する気持ちで読んでいたので

(引用はじめ)

「ぼくは赤んぼうを大学病院につれ戻して手術をうけさせることにした。ぼくはもう逃げまわることをやめた」

(引用おわり)

の所を読んで涙が出てきました。きっとバードの心の中に赤ちゃんの事がずっとあって、逃げてはいたけれどほんとに真剣に考えて出せた結果なんだと思いました。

アフリカに今まで行けなかったのではなくて、行かなかっただけだという事と、赤ちゃんの事を考え始めたら、アフリカに行くことはそんなに重要な事ではないという事に気付けたんだと思いました。

いつまでも子供っぽいバードを成長させた赤ちゃんは偉大だなと思いました。

(おわり)

『究極の2択小説』

まず読んで感じたのは、自分の子供が障害や、なんらかの病気を持って生まれてくる場合に、誰もが最初から現実に向き合えるほど、精神的にタフではないのかもしれないと思いました。

困難な問題には時間をかけて、少しずつタフな人間に成長していく、そんな風に作品を読ませてもらいました。

まったく違うかもしれませんが、ゲイバーの菊比古と、脳ヘルニアの菊比古が同じ人物として対応していて、大人の菊比古に〈彼は昔のかれならず〉と罵られて、覚悟を決めたようにも読めました。

あのバーで180度発想を転換し決断するのは村上春樹さんの『世界の終わり〜』っぽい気がしました。

火見子は、結婚をしている主人公と寝たり、多元的宇宙という思想の持ち主であり、まるで村上春樹の本から飛び出てきたような人物だったので、村上さんは大江作品の影響を受けているのかなと思いました。

現実では、五体満足に子供が生まれても育児放棄や親から虐待され殺されてしまうのは、子供の障害や病気と戦っている親達からすれば寂しいことではないでしょうか。

この作品の冒頭の医師達が、悪役すぎて、〈現物を見ますか？〉と、人を物扱いしたり、〈解剖されて死んだ方が世の中のため〉など、言いたいことを言われすぎて自分がバードの立場なら確実にキレていると思います。

バードの妻に〈あなたはわたしのことも赤んぼうのことも、本気で考えたことはないのじゃない？あなたが本気になって考えているのは自分自身についてだけなのじゃない？〉と言われていたのを踏まえると、火見子とのアフリカ旅行を諦め、子供を育てるという決断はずいぶん別人に成長したもんだなと思いました。

バードからホープにあだ名を変えよう。

そして、いつかバードが、そうだ！ 家族3人でアフリカ旅行へ行けばいいんだ！と気付けば〈希望〉のある未来が待っているはず。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

個人的な体験 大江健三郎 読書感想文

バードの sex を考えながら自転車で疾走していたら事故った。夏の陽射しがほぼ垂直に照りつける午後、表参道の細い路地で、主人公は自ら降りかかったある日の事件から目を背け、女友達の寛大な性の受け入れに溺れ、自分に都合の良い自然の成り行きを望みながら先延ばしに見た逃亡の白昼夢に、わたしもまたどっぷりはまっていたのだろう。ガードレールの衝撃によって夢ではないと覚めたとき、わたしの右太ももには、血で滲んだアザが刻印されていた。

というのが、数日前のわたしの個人的な体験。書き手が言う「かつてあじわったことのない深甚な恐怖心」を、わたしはまだ体験したことはないし、今後あるかどうかとも与り知らない。太陽のせいだった、とカッコつけて言ってみたい。

終盤、火見子の MG がギアを上げながらカタルシスに向かい、赤い風になって雨を走るさまは、精神が疾走するときの快感のよう。自己欺瞞から逃れようと決断するバードの「根本的な浄化」へ向かう道程に、菊比古の登場は、ヘアピンカーブをトップギアで曲がり切った達成感と同列に、その表現は表皮が切れそうに鋭い。恐怖感に背かない若くて青い、書き手が狙った文体のせいなのか依存性と中毒性を感じる。

実存文学としてこの小説を見たとき、偶然の事件を有りの儘に受け入れざる主人公の若き精神は、自己欺瞞を許せない自分と対峙したとき、誰かのためでも、また神との誓いでもなく、逃げない自分と邂逅できる唯一無二の機会。書き手の戦略に堕ちたわたしもまた、バードと一緒に自己を暴く小説的なロードムービーの中にいたように思う。

結末に、人生と向き合えたバードの精神は晴れやかで、引き受けた妻も家族もこれから起きうる数々の重荷を背負う覚悟が明るい。ただし恐ろしい。今日よりも強くなれる明日を信じたい。

(おわり)

逃げまわるといふ基準とその是非

予備校講師の主人公バードは、生まれた子が頭部に異常をもった奇形児だとわかり、彼の死を願い、大学の同級生との飲酒やセックスにふけるが、逃げまわってはいけないと、自分の子を受け入れ、バードという子どもじみたあだ名を捨てる物語。

「それはぼく自身のためだ。ぼくが逃げまわりつづける男であることを止めるためだ」 (p. 248)

この決意が、逃げないことにつながるのだろうか。

バードは生まれた子の育児は不可能だと、預けた病院で、子に砂糖水を飲ませてもらうことで殺してもらうよう暗に取り計らった。間接的な死を施した。

しかし子に体力がつき、いざ手術をするという段になって、バードは子を引き取った。そして、同級生の知人の医師に頼んで、合法的な形で子を処分してもらう決意をした。

この段階で、バードは逃げまわらなくなったのではないか。

「赤んぼうの怪物から逃げ出すかわりに、正面から立ちむかう欺瞞なしの方法は、自分の手で直接に縊り殺すか、あるいはかれをひきうけて育ててゆくかの、ふたつしかない」 (p. 247)

同級生の知人の医師に処分を直接頼むことは、自分の手で縊り殺すようなものではないか。そして同級生とアフリカへ行き、妻やその両親からも縁を切る。この判断は、逃げなのか。

子を引き取ったのは、旧友のバーを訪れ、彼に過去の青い自分の武勇伝を聞かされ、気持ち良く扇動された結果、酔いも回り、「そこまで言うなら育ててやんよ！」の勢いがどうしても強い。

子どもの死を願い、生を受け取る前にその芽を紡ぎ取ることに成功したのに、そんな一過性の判断により全てが覆る。

*以降は時が経過しており、良くも悪くもバードは全てを受け入れた後だから、清々しい。それよりも、子を元の病院に連れて行って手術が成功したとわかったとき、バードは逃げまわらなくて良かったと心の底から思えただろうか。自分の手を汚したという結果でも、病院へと連れ戻す車内で死んでほしかったと一切思っていないか。

いずれにせよ、バードはもう昔みたいには飛べない。

(おわり)

『個人的な経験』 読書感想文

鳥は「すべての災厄が湧き出てきたあの穴ぼこ」を嫌悪し、赤んぼうの怪物に一生涯しがみつかれて暮らす絶望的な自分の将来を案じ、自己防衛の情熱にかられ、手術しても見込みのない赤んぼうの死を望んでいるエゴイズムを恥ずかしく感じ、火見子に痛めつけられたいという自分勝手な欲求にかられます。そして居候でありながら我が物顔で振舞い、世界中の不幸を自分一人が抱えているという態度でいます。火見子を手段としてしかみれていません。それでも火見子は、鳥が赤んぼうを闇に葬ろうとした時、自分の手を汚してまでも、その手引きをします。赤んぼうに着せる最後の服を時間をかけ選んだり歯固め用のおしゃぶりを用意する事から火見子は無意識では赤んぼうを葬りたくないと考えているのだと思いました。

葬る手はずが整い、鳥は自由を感じますが、熱望していたアフリカ行きに魅力を感じなくなってしまった自分に気づきます。情熱を無くしそうな鳥を励ます為、火見子は鳥との将来への希望の為に共犯者になった事を打ちあけます。その告白中鳥は、赤んぼうを葬る病院へ運ぶ車に屋根がなく赤んぼうが濡れてしまわないかと、なんとなく心配しています。

赤んぼうをいかがわしい墮胎医に見捨てたあと、二人は酒場へいきます。鳥は、そこでウイスキーを飲み干した後、「菊比古」というカンフル剤がきいたのか、突然体の奥底で堅固で巨大なものが起き上がり、吐いてしまいます。恥知らずな事を無数に重ね逃れていただけで、何もまもっていない事によく気づきます。「自分自身の為、逃げまわりつづける男であることを止める為」赤んぼうを引き受ける事に希望を見出します。

「あなたはいろんなことに忍耐しなければならなくなるは～」火見子の最後のはなむけ、じわじわと感動しました！ちょっと泣いてしまいました。

(おわり)

『 自己欺瞞の毒 もしくは甘い涙 』

以前、養子制度の進んだアメリカで、敢えて障害児を引き取り、育てにくさを生きがいにする養父母の話聞いた。そのように、自ら障害児を育てる選択をする人々がいる一方、通常の親は健常児を望む。現実には、綺麗事ではないからだ。

実際に我が身から産み落とす女性なら、どんな赤ん坊でも受け入れる必然性が備わっているが、男性は目の前の赤ん坊の父になる「覚悟」が別に必要なのだ。そんな覚悟を持ってないでいた鳥は、重篤な障害を持つ息子を前に、自己欺瞞へと深く沈んでしまう。

鳥は、息子に対して病院での衰弱死を願う。息子の頭に巻かれた包帯を見て、戦死者のように埋葬しなければいけないと涙を流すが、自らに都合のいい「正当化」の甘い涙だ。自己欺瞞と正当化は表裏一体だ。妻と息子の件を共有できない鳥は、自らの理解者である火見子の元へ隠遁する。火見子自身も、夫の自殺という闇を抱えていた。性的快楽に没入することで、お互いに一時は癒される。がしかし、自らが手を下さない形での赤ん坊の死を願う自己欺瞞の「毒」に侵されていく鳥。そんな鳥に火見子は、「妻にも信用されず、自己崩壊してしまう」と忠告するが、鳥自身の「個人的な体験」ゆえに救うことができない。自己欺瞞の毒は、他人では解毒できないのだ。鳥は、アルコールの摂取で仕事を頸になったり、赤ん坊の見舞いに行かなかったりと自己欺瞞の中を漂うだけだ。甘い涙の味から逃れられないでいた。

一方、デルチェフの自己欺瞞のない行動に衝撃を受けつつ、子供に対して親ができることは迎えてやることだけだと諭される。生命を繋ぐ本能を持つ人間にとって、目の前の生まれ落ちた「命」の前では、どんな理論も哲学も自己欺瞞も無力だ。ただ、迎えてやるだけなのだ。だが、感情が発達した人間にとって障害のある息子を受け入れるには、段階が必要なのも理解できる。デルチェフに送られた「希望」という言葉が重い。

名前さえもつけていなかった息子に対して、雨に濡れることを心配させた鳥。少しずつ解毒に向かっていく。以前、絡まれた不良少年たちも気が付かないほど、鳥は成長する。

「この現実生活を生きるということは、結局、正統的に生きるべく強制されることのようにです。」との鳥の言葉とデルチェフの辞書で最初に引く「忍耐」という言葉がリンクする。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『死の欲動 death drive』

障害をもって生まれた赤んぼうから、逃げたいという鳥は、やめていたアルコールに手をだし、なおかつ、かつて暴力的に処女を奪った大学の同級生、火見子の家を転がり込む。現実逃避に傾いていた鳥には、この時点で、自殺フラグが立っていた。

精神分析医のフロイトは、人間のなかにある「死の欲動《death drive》」について解説している。「死の欲動」は、破滅への衝動であり、サド・マゾ関係として表現される。鳥がバス停の前で「最も反社会的な性交」を欲したのは、潜在的な自殺願望からである。現実社会での劣等感と無気力というマゾヒズムの傾向が、振り子のように反動的に暴力的な性衝動というサディズムに現れた。赤んぼうの死を願うことは、己の死を願うことでもある。恐怖からの逃避は、自己欺瞞であり、その果てには自殺が待っている。

(引用はじめ)

「鳥、恐怖心を克服するためには、その対象を正確に限定して、恐怖心を孤立させなければならないわ」

(引用おわり)

自殺で夫を亡くしている火見子は、鳥の恐怖心を理解していた。このままだとこの鳥は、彼女の夫と同じく、自殺する、と彼女は予感した。夫の死を乗り越えてきた彼女は、特殊な性行為で、鳥のサディズムを満たしてやり、彼の恐怖心を限定してやった。彼女は、社会に適應できない仲間たちの恐怖によりそい慰めることで、自殺した夫への償いの代りとするを、使命としていた

(引用はじめ)

「そうよ、鳥。あなた今度のことがはじまってから、まだ誰にも慰められていなかったのじゃない？ それはよくないわ、鳥。こういう時、いちどは過度なくらい慰められておかないと勇猛心をふるいおこして混沌から抜け出さねばならない時に、ぬけがらになってしまっているわ」

(引用おわり)

赤んぼうを見殺しにして、アフリカに旅立ったとしても、あるいは、無責任な態度で家庭に戻ったとしても、鳥は、わりと早い段階で、死の欲動にかられて、自滅しただろう。鳥の左手が右手を握んだ瞬間があった。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343